

夏目漱石とクラシック音楽

音楽学者・元東京藝術大学特任教授

瀧井 敬子

(第11回)

漱石の初めてのコンサート体験

新元号「令和」の典拠である『万葉集』への関心が、高まっている。明治になって、『万葉集』の活字復刻を最初に手がけたのは佐佐木弘綱と信綱父子である。二人の共同編著であった。明治24年(1891)12月に完成した『日本歌学全書』(全12編)の第9編～11編が『万葉集』であった。

佐佐木弘綱(1828～1891)は息子に歌の家系を継がせるべく、信綱(1872～1963)の教育のために、上京。神田小川町に居を構えた。弘綱と信綱が主宰する歌の会「竹柏会」には、良家の子女だけでなく、多彩な人材が集まった。上田敏、島崎藤村も一時期、「竹柏会」の会員であった。

さて、橋糸重(1873～1939)は草創期の東京音楽学校のピアノの教授であった。スター的存在の幸田延と比べると、糸重は地味であったが、教育者としては多大な貢献をした。「竹柏会」の主要な歌人だったので、彼女を「歌人ピアニスト」と呼ぶジャーナリストも現れた。

そもそも佐佐木家と亀山藩の藩医を代々勤めた橋家とは、共に同藩の名望家であって、昵懇の間柄であった。橋家では糸重が生まれてすぐに父親が亡くなり、長兄が藩から選ばれて東京大学東校で医学の勉強をしていたので、佐佐木家よりも早く上京して、神田黒門町に住んでいた。

母の幸子は佐佐木家が東京に居を定めると、再び弘綱に和歌を習い、糸重も小学校帰りに和歌と

習字を習い始めるようになる。佐佐木家では四畳半の部屋が稽古場であった。

茶の花のまろき蒼に顔をかきて

叱られたりし かの四畳半(糸重の和歌)

糸重は、明治21年(1888)9月東京音楽学校予科に合格した。父のいない彼女の入学保証人となったのは、佐佐木弘綱であった。入学式には、弘綱の代理で息子の信綱が父兄として出席した。当時はまだ奏楽堂ができていなかったもので、式典は上野の寛永寺の別院で行われた。糸重は明治25年(1892)7月に、本科を首席で卒業した。だが、保証人だった弘綱は、『日本歌学全書』が完成する半年前の明治24年6月に他界したので、彼女の晴れ姿を見ることはできなかった。

糸重が脚光を浴びたのは、明治26年(1893)12月17日の奏楽堂であった。ディットリヒ教授の推挙で、フンメル作曲ピアノ・ソナタを独奏した。信綱門下の歌人大塚楠緒子(1875～1910)は、歌人仲間の糸重のためにたくさんの人にチケットを配った。会場には上田敏もいた。斎藤阿具の日記によると、寄宿舎で一緒であった夏目漱石と小屋保治を誘って、三人で行ったという。このときこそ、夏目漱石が体験した最初のコンサートだったのである。小屋はこの2年後の明治28年(1895)に大塚家に婿入りした。その直後の4月、漱石は松山の愛媛県尋常中学校に赴任している。